

『ご当地ドラマ』

「おい、待て。何をする気だ。どうするつもりだ！」

「来るなあ！ こいつがどうなってもいいのか！」

「やめろ！ 彼女に危害を加えるな！ なんの関係もない人を巻き込むんじゃない。これ以上、罪を重ねるな！」

「うるせえ！ 来るなあ！ そうさ、あの〇〇を殺したのはおれだ！ おれはあいつが憎かった。おれの人生をめちゃくちゃにしたあいつが許せなかったんだ。だから…。だから！」

「待て！ どこへ行くんだ！ そっちは崖だ！ 何をするつもりだ！」

「うるせえ！ 復讐は果たした。おれはもう…、もう！」

「●●さん！ 待ってください！」

「た、探偵さん」

「●●さん、確かにあなたは罪を犯した。しかし、人生は何度でもやり直せる！ ちゃんと罪を償うんだ！」

「来るな！ おれの人生はもう終わりだ！ こいつを道連れにして、おれは…、おれは！」

「●●さん！ こんなことをあなたの亡くなったお母さんが望んでると思いますか！？」

「ハッ…」

「あなたのことをあれほど大切にしていたお母さんが、今のあなたの姿を見て、喜ぶとでも思ってるんですか！？」

「（人質にあててた銃口をゆっくり下げていく）」

「死んだ者が望むのは復讐なんかじゃない。お母さんは、あなたが幸せになることを願っていたはずだ」

「（ブルブル震える）」

「たとえ何年かかっても、罪を償ってください。あなたのお母さんだって、そう望んでいるはずだ」

「…ち、ち、ちくしょおおお！」

「はい、カット！ …うーん。ちょっとなあ」

「監督さん、どうですか？」

「うーん。ちょっとねえ…」

「あれ？ 一応、台本通りにいきましたけども。（横に）ねえ？ なんかイメージと違います？」

「いや、あの一、役者のみなさんはちゃんとやってくれてるんだけどねえ。ちょっとなあ」

「なんか違うところあれば、教えてください。修正しますんで」

「いや、違うとかじゃなくてねえ。うーん」

「なんですか？ 演技方を変えるとか？」

「いや、そうじゃなくてね…、短い」

「はい？ 短い？」

「うん。今のシーンがねえ。短か過ぎるのよ。ちょっと悪いんだけど伸ばしてもらえる？」

「伸ばす？ どういうことですか？」

「いや、あのね、ドラマのこのラストシーンまでに、すごいテンポよく来ちゃってるから、尺が余ってんのよ。だからこのシーン、ちょっと伸ばしてもらえる？」

「今からですか？」

「そう。悪いんだけど、もう一回やってくれる？ みんな尺をなるべく伸ばすことを意識して」

「そんなのどうしたら？」

「まあ台詞の語尾を伸ばすとか、同じことをやたら繰り返すとか」

「そんなことしていいんですか？ 脚本家の先生、怒りませんか？」

「うん。大丈夫、大丈夫。なんのこだわりもないって言ってたから」

「そうですか。じゃあまあ、もう一回」

「うん。とにかくこのシーンを伸ばすことを意識して」

「おい、待て。何をする気だ。どうするつもりだ！」

「来るなあ！ こいつがどうなってもいいのか！」

「やめろ！ 彼女に危害を加えるな！ なんの関係もない人を巻き込むんじゃない。彼女に危害を加えるな！ その人は関係ないんだ。ほんとに関係ないんだ。無関係なんだ！ これ以上、罪を重ねるな！」

「うるせえ！ 来るなあ！ そうさ、あの〇〇を殺したのはおれだ！ おれがあの〇〇を殺したんだ！ おれはあいつが憎かった。あいつをおれは憎んでいた。あいつはおれに憎まれていた。おれの人生をめちゃくちゃにしたあいつが許せなかったんだ。あいつをおれは許せなかった。あいつはおれに許されなかった。だから。だから！」

「待て！ どこへ行くんだ！ どこへ行くつもりなんだ。どこだ？ え？ どこだ？ どこなんだ？ あ、そっちは崖だ！ 何をするつもりだ！」

「うるせえ！ 復讐は果たした。おれはもう…、もう！ もう—————」

「●●さん！ 待ってください！」

「た、探偵さん」

「●●さん、確かにあなたは罪を犯した」

「た、探偵さん」

「しかし、人生は何度でもやり直せる！」

「た、探偵さん」

「ちゃんと罪を償うんだ！」

「た、探偵さん」

「来るな！ おれの人生はもう終わりだ！ こいつを道連れにして、おれは…、おれは！」

「●●さん！ こんなことをあなたの亡くなったお母さんが望んでると思いますか！？」

「ハッ…」

「どうなんですか？ 望んでると思うんですか？」

「ハッ…」

「それとも思わないんですか？ どうなんですか？ 思うんですか？ 思わないんですか？ どっちなんですか？ どうなってるんですか？」

「ハッ…」

「あなたのことをあれほど大切にしていたお母さんが、今のあなたの姿を見て、喜ぶとでも思ってるんですか！？」

「（人質にあててた銃口をゆっくり下げていく。また上げる。また下げる。上げ下げ）」

「死んだ者が望むのは復讐なんかじゃない。お母さんは、あなたが幸せになることを願っていたはずだ。逆に言えばつまり、あなたはお母さんのために幸せにならなきゃいけないんだ。まあそれはつまりどういうことかと言うと、要するにあなたが幸せになることによって、ぶっちゃけた話、お母さんはもう死んでるから何を望んでるかなんて分からないのが実際のところだけでも、とは言え、基本的な考え方としては、親はまあそりゃ自分が死んだ後、子どもが幸せになって欲しいに決まってるわけで、そのごく一般的な思考回路で考えていけば、なんかその、そういうことだ！」

「（プルプル震える）」

「たとえ何年かかっても、罪を償ってください。あなたのお母さんだって、そう望んでいるはずだ。だってそれはやっぱり親なわけだし、まあ私は親やったことないから、ほんとのところは分からないけども、まあ普通に考えたらそりゃこんなわけわかんねえ殺人鬼になってほしいわけねえわねえ」
「…ち、ち、ちくしょおお！」

「はい、カット！ …うーん」

「どうですかね。一応、伸ばす感じでやってみたんですけど」

「うん。それは良かった。尺としては十分かなって感じがするんだけど、あの一、ちょっとねえ」

「ん？ まだなにかありますか？」

「いや、あのねえ、ちょっと今さらに悪いんだけど、これさご当地ドラマなのよね」

「はい？ ご当地ドラマ？」

「そう。ご当地ドラマだからさ、ご当地のものを色々に入れこまなきゃいけないんだった」

「どういうことですか？」

「うん、あの、それぞれのご当地を題材にしたドラマをたくさん作るっていう企画で始まっているやつでさ。そうだった。忘れてた。ちょっと悪いんだけど、今からこのシーンご当地を入れこんでもいい？」

「はあ。まあ我々は役者なんで、監督の指示に従いますけど」

「あ、そう。えっとね。まずね、聖徳太子を出してもらっていいかな？」

「はい？ 聖徳太子？」

「そう。このご当地っていうのが、聖徳太子にゆかりがあるみたいで。聖徳太子を出したいところなのよね」

「…それ、どうしたらいいのかなあ」

「まあなんかそのへんはうまい具合に」

「うまい具合と言われても…」

「あとね、鹿がちょっと有名みたいで」

「鹿ですか？」

「そう。鹿を出せるかな？」

「どうやって出しましょう？」

「まあ、そのへんはうまい具合に。あとねえ、やまびこがね、欲しいんだよねえ」

「やまびこ？」

「そう。やまびこがちゃんと返ってくる人と来ない人がいる、みたいな話があるみたいなのね」

「はあ」

「ちょっと、うまい具合に入れてもらえるかなあ。やまびこを。あとねえ、思いの滝っていう滝があるみたいなのね。悲しい恋の逸話があるらしくてさ。まあ詳しいことはあんまり分からないんだけど」

「大丈夫ですか？ そんなので、よく分からず入れちゃっていいんですか？」

「うん、いいのいいの。なんか滝に身を投げた、みたいなやつがあつてさ。そのあたりをうまい具合に入れてもらえるかなあ」

「おい、待て。何をする気だ。どうするつもりだ！」

「来るなあ！ こいつがどうなってもいいのか！ この鹿がどうなってもいいのか！」

「やめろ！ その鹿に危害を加えるな！ なんの関係もない鹿を巻き込むんじゃない。これ以上、罪を重ねるな！」

「うるせえ！ 来るなあ！（鹿に）暴れるなあ！ そうさ、あの〇〇を殺したのはおれだ！ おれはあいつが憎かった。あいつが許せなかったんだ。（鹿に）ちょ、ちょっと暴れるな！ 暴れるな、おい。（鹿を撫でる感じで）おー、よしよし。どうどう。えっと、だから！」

「待て！ どこへ行くんだ！ どこへ行くつもりなんだ。そっちは滝だ！ あの悲しい恋の逸話があることで有名な、思いの滝だ！ そっちへ行くな！」

「うるせえ！ 復讐は果たした。おれはもう…、もう！ もう—————。（やまびこ）もう——、もう——、もう—————」

「●●さん！ 待ってください！」

「た、探偵さん」

「●●さん、確かにあなたは罪を犯した。しかし、人生は何度でもやり直せる！ ちゃんと罪を償うんだ！」

「来るな！ おれの人生はもう終わりだ！ この鹿を道連れにして、おれは…、おれは！」

「●●さん！ こんなことをあなたの亡くなったお母さんが望んでると思いますか！？」

「そうだそうだ！ 望んでるわけないぞ！」

「そうだ！ あなたのお母さんのことを考えてるのか！」

「そうだそうだ！ お父さんのことも考えてるのか！」

「そうよ！ そんなことしちや駄目よ！」

「どうしてこんなことをしたんだ！」

「ばかばかばか！お前の母ちゃんべそ！このへちま野郎！」

「罪を償うんだ！」

「同時に喋るなあ！！ まあおれは一度にすべて聞き取ることができるからいいけども！ 誰だ、ただ悪口を言ってた奴はあ！！」

「あなたのことをあれほど大切にしていたお母さんが、今のあなたの姿を見て、喜ぶとでも思ってるんですか！？」

「（人質にあててた銃口をゆっくり下げていく。また上げる。また下げる。上げ下げ）」

「死んだ者が望むのは復讐なんかじゃない。お母さんは、あなたが幸せになることを願っていたはずだ。逆に言えばつまり、あなたはお母さんのために幸せにならなきゃいけないんだ。まあそれはつまりどういうことかと言うと、要するにあなたが幸せになることによって、ぶっちゃけた話、お母さんはもう死んでるから何を望んでるかなんて分からないのが実際のところだけど、とは言え、基本的な考え方としては、親はまあそりゃ自分が死んだ後、子どもが幸せになって欲しいに決まってるわけで、そのごく一般的な思考回路で考えていけば、なんかその、もうちょっとうまい具合にやっといてよ」

「（プルプル震える）…ち、ち、ちくしょおおお！（やまびこ）ちくしょおおお、ちくしょおおお、うまい具合にやっといてよおおお」

「はい。はい。はい。なるほど。そういうドラマということですね」

「ええ。ご当地ドラマを作るというドラマで、この感じでいけたらなって思ってるんですけども」

「うーん。まあ先生がお書きになった脚本なので、まあこの線でいけたらとは思いますが…」

「ええ、どうぞよろしくお願いします」

「はい。ま、あの、ええ、いったんいただきます。お疲れ様でした。…（隣りの人に）やっぱりご当地ドラマを作るのは無理があったのかな。どう思う？」

「いや、あの先生も、もうろくしたな」

おわり

